

館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

3月 1日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 8：7～13

「新しい契約」

カッコ内は、エレミヤ書 31：31-34 が引用されています。出エジプト後のシナイ契約は、契約の当事者である人間に力がなく、守りきれませんでした。神様はこれを古い契約とされ、時至って「新しい契約」を結ばれました。「新しい契約」は、石の板でなく、人の心に書き付けられました。エゼキエル書 11章には「新しい霊を授ける」とあり、キリストにある新しい人のことです。何も言わなくても、神様の思いがわかるようになり、心におきてがあるので、喜んで従うようになるでしょう。「主を知れ」と言われなくても、小さな子供に至るまで主を知るようになるのです。そして、神様は「彼らの罪を思い出さない」と言われます。キリストが十字架で死んでくださったゆえに。

3月 2日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 9：1～10

「古い契約の制限」

初めの契約にも、礼拝についての様々な規定がありました。この規定は、出エジプト記、レビ記、民数記等に記されています。祭司は聖所に入り、礼拝の務めを果たしました。ただし、奥の、至聖所には大祭司が年に一度だけ入りました。そのとき大祭司は、動物の犠牲の血を携えていかなければなりませんでした。その血は、大祭司自身と、民全体の罪をきよめるためのものでした。しかし、古い契約のもとでは、いけにえが何度捧げられても、それを携えてくる人の心まできよめることはできませんでした。礼拝に関するこのような古い規定は、神様がさらにすぐれた契約をキリストによって確立なさるまで、礼拝者を導くために課せられた外的な規定だったのです。

3月 3日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 9：11～15

「祝福の大祭司」

地上の幕屋について述べた著者は、天の真の幕屋について言及し、キリストの贖いをもたらした三つの祝福について述べています。第一は、キリストが血を流すことによって獲得してくださった永遠の救いという事です。第二に、キリストが流された血によって、良心を罪の麻痺から解放し、生ける神に仕えるようにしてくださったという事です。第三に、これらのみわざは、キリストが、「新しい契約の仲保者」（15節）であるという事です。従って、神が約束された永遠のみ国を、神が召されたすべての者に保証できるということを意味している

のです。この結果、キリストの死が古い契約によって規定された罪の刑罰からの解放を与えるので、永遠の国を受け継ぐ事は確実なのです。

3月 4日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 9：16～22

「キリストの死の必要性」

古い契約が成立するための犠牲制度は、キリストの新しい契約における完全な犠牲の投影です。ここで著者は、神との新しい関係が開かれるために、なぜキリストの死が必要であったかということに答えるために、「遺言」という一般的な例を持ち出してきています。17節に「遺産は死によってのみ効力を生じ……」とあるとおりです。つまり、遺言は、遺言を残した当人が死んだ時、初めて効力を発揮するのです。そのように契約もまた、イエス・キリストの十字架の死によって初めて成立するというのです。18節の冒頭に「だから」とあるのは、「遺言」と「死」との関係を、「契約」と「血」との関係に移して、「初めの契約も、血を流すことなしには成立したのではない」と言っているのです。

3月 5日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 9：23～28

「完全な救い」

ここには、アロン系の大祭司と永遠の大祭司キリストとが対比されています。大祭司は、年に一度動物の血を携えて至聖所に入り、民の代表として罪の贖いをしました。これはやがて十字架によって全人類の救いを完成されるキリストの型でした。こうして、キリストは地上においてになり、ご自身の血をもって、全人類の罪を負うために、十字架の上で一度だけご自身をささげられたのです。人間は罪ゆえに、必ず一度死に、しかもその罪のゆえに死後も裁かれるのです。しかしキリストを信じた者は、彼の身代わりで、裁かれることがなく永遠の命が与えられるのです。そしてキリストは、信じた人たち完全な救いを与えるために再臨されるのです。

3月 6日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 10：1～10

「御旨を行うために」

そろそろ、キリストのご降誕を記念するクリスマスが近づきました。御子イエス・キリストさまがベツレヘムの家畜小屋に貧しくお生まれくださったのは、やがて、十字架でお死にくださるためでした。「ごらんください。わたしはここにおります。神よ。わたしはみこころを行うために参りました。この巻物の書に、わたしについて書かれていることを果たすために来たのです」この地上においでくださったキリストのお心は、5節から7節に記されているとおりです。

十字架で「ただ一度、イエス・キリストのからだをささげられたことによってきよめられた」ので、キリストを信じる者の罪は全く除き去られて、新しく、キリストの命に生かされるのです。

3月 7日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 10：11～25

「確信に満たされて」

祭司を始めとする人々は、年ごとに、いけにえをささげるたびに罪の記憶がよみがえってきました。雄牛ややぎの血は罪を除くことができないからです。しかし、キリストは私たちの罪のために十字架についてくださいました。キリストを信じる人は、罪ゆるされ、永遠にきよめられたのです。ですから「彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない」と言われます。そして、キリストを信じた人は、キリストという生きた道を通して聖所にはいることができます。すなわち、神様にいつでも祈り、助けと祝福を受けることができるのです。ですから私たちは、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ神様に祈ることが許されています。私たちは、愛と善行に励み、互いに励まし合い、集会を守り続けましょう。

3月 8日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 10：26～31

「厳しい警告」

著者は、もし人が真理の知識から離れようとすれば、唯一の救いの道を放棄することになることを告げています。モーセの律法のもとでも、もし人が神を否定し、契約に反すれば2、3の人の証言によって石で打ち殺されねばなりません。そこにはもうその罪の赦しはありえませんでした。まして、神がキリストの死によって新しい契約の民とされた者が、この新しい契約に反して、もとの生活に戻るようであれば、その者に対する神の刑罰は、どれほど厳しいものになることでしょうか。キリストはただ一度だけ、人間の負うべき刑罰を一身に受けて死なれたのであって、繰り返しはあり得ないのです。そこでヘブル人への手紙の著者が旧約の律法と預言者の言葉で、鋭く警告を発しているのです。

3月 9日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 10：32～39

「信仰の勇者たちの証」

著者は、信仰者が確信に満たされつつ歩むために、「背教者に対する厳しい警告」(26～31節)を述べた後に、迫害のさなかにも信仰の勇者たちが数々の恵みを証したことを述べています。ここでは、初代クリスチャンたちの「聖徒の交わり」の具体的な内容を知ることができます。その第一は「逆境と不遇の中に

ある人々と苦勞を共にしながら激しい戦いに耐えた」(33節)ということです。第二に、「獄に入れられた人々を思いやった」(34節)ということです。第三は、彼らが「財産を奪われても喜んで忍んだ」(34節)ということです。どうしてそのようなことが出来たかと言えば、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知っていたからです。

3月10日 今日を通読箇所 ヨブ記 1章1～12

「天上、靈界の序幕」

ヨブはほとんど申し分ない聖徒で、その生涯の証はいつも神の栄光をあらわし、俗に言えば神様のご自慢だった。これに対して、サタンは、ヨブの信仰も一種の取り引きで、祝福のために神を信じているのだ。祝福を失えばすぐ神を離れるだろうと言う。この訴えに対する神の勝利のためには、否ヨブの証が全うされるためには気の毒だが、理由なく祝福を失った場合の、ヨブの態度を見る以外にないのだ。

3月11日 今日を通読箇所 ヨブ記 1章13～22

「事故と破産」

突然にヨブ一家を襲った災害は悲惨だ。今日の言葉で言えば、会社は破産して無一物となり、災害と事故で子供らに死なれ、悄然とヨブ夫妻が取り残されたのである。ここにおいてヨブは、衣を裂き、頭を剃り、地に伏したが、その悲しみの間にも、絶えて一言も、神様に対する不満、不信仰の言葉は出なかった。その悲痛な言葉の中には、かえって昨日までの豊かな神の祝福に対する感謝にみちている。

3月12日 今日を通読箇所 ヨブ記 2章1～10

「ヨブの重い皮膚病」

サタンはそれでも黙らない。誠に彼はその名の如く、神に敵視し、批評し、試みる者である。次にヨブは重い皮膚病になった。今度は祝福を失っただけではなく、身に災害を受けたのだ。しかしヨブの神に対する信仰と愛と従順の心は堅固だった。奥さんの方はさすがに参ってしまった。しかし彼女の言葉のように不信仰に陥ったら？結局救いも希望も失なわれ、その言葉のように夫婦心中が関の山だ。

3月13日 今日の通読箇所 ヨブ記 2章11～3章10

「三人の友」

「ソロモンとヨブは、人間の悲惨を最もよく知り、語った人である。一人は最も幸福な人で、快樂の空虚を、一人は最も不幸な人で、災害の实在を知った」パスカル。ヨブの三人の友は、うわさを聞いて尋ねて来たが、あまりの有様にただ泣くだけだった。ヨブは、昔は祝福された自分の誕生を、今は悲しみの心で呪う。救いの希望がなければ、人の誕生も決して手ばなしのお祝いではない。

3月14日 今日の通読箇所 ヨブ記 3章11～26

「自殺願望」

「私なんか生れて来ないほうが良かった。今はただもう早く死にたい」一生の間に、そういう気持ちを一回も経験しない人がいるだろうか。今ヨブはその気持ちを告白している。しかし、ヨブの言葉には不思議な節度があつて、生れた日を呪っても神を呪うことをせず、死を望んでも自殺をほのめかす言葉はない。「人を殺す」のは、ほかの人でも自分でも、同じく罪であると知っているからだ。

3月15日 今日の通読箇所 ヨブ記 4章1～21

「神秘家」

友人のひとりエリパズは、幾分か神秘的な傾向を持った人らしい。彼はヨブに忠告を試みる。つまり「神は正しい方だから正しい者を祝福する。罪を犯す者には、反省を与えるため、あるいは裁きのために災害を与える。そして神の前には、決して真に正しい人はあり得ない」言いかえると、ヨブの受けた災害はヨブの罪の結果だ。罪を反省し取りのぞけば、災害もまたのぞかれ祝福も戻るだろうと。

3月16日 今日の通読箇所 ヨブ記 5章1～27

「大いなる神」

エリパズの同趣旨の話は続く。これは「神を信じ神に祈り、神に従う者に対する神の祝福がどんなに行き届いたものか、また神を崇めず、従わず、罪を犯す者は、どんなに賢く周到であつても、権勢や富があつても、神の裁きと呪いを逃れることができない」という真理を歌った、荘重な詩として味わうことができる。しかし、この場合のヨブにとって、この言葉は慰めになったろうか？

3月17日 今日の通読箇所 ヨブ記 6章1～13

「全能者の矢」

ヨブは決して自分の罪の自覚に欠けている人ではない。子供たちの誕生日ごとに、罪の許しを求めてはん祭を献げていたことは、1章にも記してあった。しかし、ヨブがほかの人にくらべて、特別に罪が多いとは考えられない。それなのに神から受けている災害は特別にひどいのだ。これがヨブの罪に正比例するとはとても考えられない。それを言おうとするヨブの言論は、悲痛にして荘重な詩となる。

3月18日 今日の通読箇所 ヨブ記 6章14～30

「水のない川」

ヨブは、理屈に合っているようで慰めにならない友の言葉に失望する。この地方にはワデイという谷があって、時には水が流れ、時には氷が張る。しかしいつかその水はかれてしまう。そしてこの水をあてにして来た隊商たちは失望させられるのみか、砂漠で死んでしまうことさえある。そのようにエリパズの言葉はどこかすれていて、なぜか慰めにも光にもならない。ヨブはそう訴えるのだ。

3月19日 今日の通読箇所 ヨブ記 7章1～10

「苦悶の夜」

どんなにひどい労働者も夕方日当をもらう楽しみがあり、奴隷でも夕方からは休める。しかしヨブは、夜になって月が出て、まるで日中の炎熱が続くように、休むことが出来ない。苦痛と苦悶のために眠れないからだ。彼の生はただ呼吸、しかもため息だけの生活のようだ。ヨブは死によってこの苦難に終止符が打たれることを望む。ヨブにはまだこの苦難の本当の意味目的が示されていないのだ。

3月20日 今日の通読箇所 ヨブ記 7章11～21

「むしろ死を望む」

神様が夜も昼もヨブを見つめ、深くヨブにかかわっておられることが、疲れ果てたヨブにはかえってわずらわしく、むしろ恐ろしいように感じられる。放っておいてくれれば私は死ぬのに。それがヨブの叫びだ。しかし、試みのすぎ去った時にはヨブも言うだろう。「私は常にあなたと共にあり、あなたは私の右の手を保たれる。あなたはさとしをもって私を導き、後ろに私をうけて栄光にあずからせる」

3月21日 今日の通読箇所 ヨブ記 8章

「ビルダデの発言」

ビルダデの言葉も大体エリパズの論旨と似ていて、ヨブの苦難を、ヨブの知らない、その子供たちの罪に対する神の裁きだと言って、ヨブに謙遜反省を勧告する。その言葉に対してもヨブは降参しない。しかし今ビルダデの言葉を、「神が正しい者を祝福し悪しき者を罰する」という原則的真理を示す、独立した文章として読めば、すばらしい詩だ。こういう読み方もヨブ記のひとつの味読なのだ。

3月22日 今日の通読箇所 ヨブ記 8章1～24

「神の公平は？」

ヨブは言う「神は全能であり、全く自由なお方だ。誰も神に対して議論することも、抵抗することもできない。神が人の罪を捜索し、その罪を罰するとすれば、誰がその裁きの前に立ち得よう。しかしもしビルダデの論旨をそのまま、押しつければ、神様は結局、不公平な、気まぐれな神となってしまう。ほかの人とくらべて見た場合、ヨブの苦難がヨブの罪に正比例しているとは思えない。これにはきっと何か別のわけがあるのだ」と。確かにそうだった。

3月23日 今日の通読箇所 ヨブ記 9章25～35

「仲保者」

「苦難そのものよりも、苦難の理由、意味のわからないのが苦しい」と言われる。ヨブの苦難について、ヨブにかわって弁護し、神にむかってその理由を質問し、そしてその結果をヨブに説明してくれる者はいないか。ヨブはそう言い、いわゆる「仲保者」を求める。新約には「神は唯一であり仲保者も一人。すなわちキリストである」とあり、我々が神の奥義であり、かつ仲保者であるキリストを持つことはすばらしい。

3月24日 今日の通読箇所 ヨブ記 10章

「土の器」

「一寸先きは闇」と言うが、人間が生まれた時に、彼にどんな人生が待っているか、誰にもわからない。ヨブは自分が神のみ手によって作られた、すばらしい「神の作品」であると感じている。しかし今のヨブの心境では、作り主なる神は、ヨブの罪を追求し、徹底的にそれを問題にしておられるように見える。それに耐える人間がいるはずがない。早くこの苦役から解放されたいと。これはかえって友人たちの言論から追い込まれた心境といえる。

3月25日 今日の通読箇所 ヨブ記 11章

「ゾパルの言論」

今度はゾパルの言葉だ。しかし彼も、前の二人の友人の趣旨をくり返すに過ぎず、「ヨブは自分の義を主張して悔改めず、神に対して突張っている」と言う。ヨブの言葉を断片的にとらえれば、そうとれなくもない発言もあるが、ヨブの言わんとする趣旨はそれと違う。ヨブの友人たちは案外事実を見て判断するより、自分の教理的主観や先入主の色眼鏡が強い。それ故話が噛み合わない。

3月26日 今日の通読箇所 ヨブ記 12章

「手に神を携える」

「勝てば官軍」という言葉があるが、昔神の祝福を受けていたころは人に尊敬されたヨブであるのに、不遇な立場になると、今度は自分の罪のため祝福を失い、神の裁きを招いたとあざけられ、頑固で悔改めないと非難される。ヨブの友人らはまるで「自分の手に神を携えて」いるように、簡単に、神の正義、裁きを代表したつもりでいる。しかし、とヨブは言う「神様の本当のみ心がわからずに私は苦しんでいるが、君たちだって神様を全部わかっているわけではない」と。

3月27日 今日の通読箇所 ヨブ記 13章13～28

「これこそ私の救い」

「この調子では、結局私の運命は尽きて、このままの悲惨な状態で私は死ぬ…神に殺される…かも知れない。しかし私は、何か深い神のみ心と摂理があることを信じて、最後まで神の前に信仰の道を守ってゆく。神様のお取りあつかいも、友達の批評も、納得ゆかないが、しかし自分は信仰を守ってゆく」とヨブは言う。「これのみが私の救いだ」と。

3月28日 今日の通読箇所 ヨブ記 14章1～17

「花のいのち」

「花のいのちは短くて、悲しきことのみ多かりき」とは、林芙美子の有名な言葉だ。それもあるいはこの章あたりから出ているかも知れない。しかも人のいのちは短いだけでなく、罪と呪いにみちている。「主が私の罪を見のがされるように。罪を袋に入れて、壁の中に塗りこめて下さるように」ヨブは自分の死を思うとき、そういう祈りをささげるのだ。

3月29日 今日の通読箇所 ヨブ記 15章1～16

「空論」

ヨブのような気の毒な人に対して、慰めのためお見舞いに来た友人たちなのだが、議論が激してくると、まるでヨブをやっつけに来たような調子になる。エリパズはヨブに向かって「お前はしゃべりすぎる。役にたたない議論は風のようなだ」などと言っている。ところが私が読むと、どっちの言葉が風のようなか、ご本人にわかっちゃいないので困る。

3月30日 今日の通読箇所 ヨブ記 15章17～35

「悪しき人」

ヨブ記の一つの読み方は、ある部分を独立した一つの詩として見ることだ。エリパズの言論のこの部分は、悪しき人とその生涯を、みごとに描写している。27、28には、顔も腹も脂肪でぶくぶくになった人が出てくる。罪の成功で、食いすぎと安逸に暮した結果だ。しかし彼は、神の祝福を失った廃虚に住んでいるようなもので、決して安全ではないのだ。

3月31日 今日の通読箇所 ヨブ記 16章

「神に向かって涙をそそぐ」

世の中にこれほどの悲痛な名文があるだろうか。一体苦難の中にある人に向けて、幸福な立場の人が3節にあるように「激して語る」ことがあって良いものだろうか。ヨブも今は自分の言葉も人の言葉も、神様のみ心もわからない。ただ「あまりひどい」と言うだけだ。しかしそれでも信仰によって「高いところ」を見上げ「神に向かって涙をそそぐ」のだ。